



対話の中で育む「多文化理解」への意識

文学部 山川 智子



2013年に文教大学・文学部に着任。専門は、言語社会学、ドイツ・ヨーロッパを中心とした言語文化教育研究。戦後の欧州の言語政策を先導する欧州評議会の活動を調査している。担当科目は、ドイツ語、ヨーロッパ文化研究、多文化理解概論、比較文化論など。言語の枠をこえたコミュニケーションのあり方について研究し、学生に伝えている。文学部の「多文化理解コース」では、学科の枠をこえた様々なネットワークを学生が構築し、それを活かして彼らが研究できるような環境づくりに取り組んでいる。
(やまかわ ともこ)

本学は学生と教員との距離が近く、毎日の学生との対話や触れ合いが、今の私の財産となっている。私の研究領域であるヨーロッパは、遠く離れた地というイメージを持たれやすいが、「多文化理解」という視点から、日本との共通点も学生たちに発見してほしいと願っている。ここでは、学生との「対話」から築かれる「多文化理解」の様々な可能性を、担当教科（「ドイツ語」「ヨーロッパ文化研究」「卒業研究」）ごとに紹介させていただく。

1. 多文化を理解するための「ドイツ語」

なぜ外国語を学ぶのか？しかも、英語以外にもう一つの外国語を？この「古くて新しい」疑問に向き合ってみたい。異なることばとの出会い、そのことばを話す人との出会いが世界を広げてくれる。それは相手の目で自分を見ることにもつながる。外国語を学ぶことで確実に視野が広がり、複眼的にもの考えることができる。

グローバル化が進み、日に日に多忙となっていく現代において、自分の母語と異なる言語と格闘し、失敗を重ね、恥ずかしい思いを何度もするという経験は、学生時代にしかできないのではないのか？ドイツ語学習においても、学生たちには、クラスの空気を読みすぎず、あまり恥ずかしがらず、小さな失敗をた

くさん重ねてほしい。そして、その失敗を記憶にとどめ、飛躍してほしいと願っている。

授業では、なるべく学生たちがドイツ語を実際に使う機会をつくるため、ペア学習やグループ学習を取り入れている。まず、挨拶表現や数字を覚え、基本文法をおさえてからは、簡単な会話をグループ内で行い、それをクラスで披露してもらうこともある。また、読解力をつけるため、様々なジャンルの教材も用意している。

ことばと文化は切り離せないので、ドイツ語圏の文化、社会、および生活を、日本との関連も考えさせつつ、映像資料を用いて紹介している。広く一般にドイツ語圏地域についての知識を学生自身が深めていけるよう、試行錯誤を重ねている。

2. 多文化理解の意識を育む「ヨーロッパ文化研究Ⅰ」

ドイツ語圏を中心としたヨーロッパの文化について幅広く学び、日本や日本文化を相対的に考えられるような授業を組み立てている。学生には、文化、歴史、教育制度も異なるドイツをはじめとしたヨーロッパについて学び、相違点とともに、本質的な共通点はないかも考えてもらいたいと思っている。さらに、そこから問題意識を深め、卒論テーマにつながる発見が得られればと願っている。

この授業では、「複言語・複文化主義」というヨーロッパの言語教育における概念を軸にしている。ヨーロッパの平和構築を考えるこの概念が、ヨーロッパ文化を考える際の鍵になるからである。「複言語・複文化主義」とは、自分の言語・文化体験を、一人ひとりが明確に意識化することで、自分の個性とともに、他者の個性をも尊重する姿勢に繋がることを諭す考え方である。

コメント用紙に書かれた学生の意見から、私も気づかされることが多い。学生一人ひとりの意見の総体が、「ヨーロッパ文化研究」という授業を形作るのだと実感している。ただ一つの「正解」を探すのではなく、相手との相互理解に基づく行動が、グローバル時代には求められることを学生と一緒に考えている。

今年の藍蓼祭では、教育研究所で「ドイツの教科書展」が開催される。多くの方たちとドイツの教育制度について、またヨーロッパについて情報交換したいと思っている。

3. 「多文化理解コース」での卒業研究

卒論ゼミでは、自分の文化や価値観を自覚した上で、周りには全く異なる多くの文化があることを意識してもらおうようにしている。自分の世界に閉じこもりがち学生が少なくないことに気づいたからである。他者を理解し、自身との折り合いをつけていくには、どう工夫したらよいか、学生たちと考えるようにしている。「言うは易し」とはよく言ったもので、頭で理解していても、なかなか行動に移すのは難しい。ただ、「難しい」ということに気づき、どうしたらそれを克服できるのかを考え続ける姿勢が大切であると考えて

いる。

「多文化理解コース」という名を持つゼミであるので、学生たちが選ぶ卒論テーマも多岐にわたっている。自分が本当に興味のあることを、どのように工夫すれば学問的な研究テーマとして認めてもらえるか、ゼミで学生たちに考えさせている。私自身も、学生の研究から学ばせてもらっている。このコースでは、教員から研究テーマを与えられるのではなく、自分で見つけ出さなければならない。テーマ選択の「自由」とともに、そこには「責任」も伴う。卒論執筆は、結局のところ孤独との戦いである。なぜそのテーマを選んだのかを自覚できないと執筆が辛くなるので、学生たちにこの点を自覚してもらっている。

とはいえ、どのようなテーマを選ぶにしても、研究にはルールがある。また、発表や議論で得た情報を活用する技がある。教員の役割は、そのルールや技も学生に伝えることである。いわば教員は「ファシリテーター」であり、研究活動におけるマナーを学生に伝え、彼らの自立心を養うことだと考えている。

多文化理解コースでは教員から学生への「一方通行」の授業は通用しない。教員も「多文化」の中の一つの要素だからである。このゼミでは、私も学生に「自分の背中」を見せなくてはならない。学生に対して、恥ずかしくない姿を見せることができているのか、自分を見つめなおす日が続いている。教育と研究を両立させなくてはならないのは、この点にあると思う。自分が研究し、教育している姿を学生に見せることで、彼らが「何か」を感じてくれるなら、こんなに嬉しいことはない。



ゼミでの集合写真